



57



55



56

中野遺跡（NN2011-1）土坑63出土 木製品

四條畷市文化財調査年報

第 1 号



平成26(2014)年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第1号であり、四條畷市文化財調査報告の第49集である。本書には、平成24(2012)年11月から12月にかけて実施した北口遺跡(KG2012-1)での共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査と、平成24(2012)年1月に実施した中野遺跡(NN2011-1)での宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。
2. 北口遺跡(KG2012-1)の発掘調査は、廣谷利雄氏からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が実施した。中野遺跡(NN2011-1)の発掘調査は、丹治尋好氏からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が実施した。いずれも調査期間等は本文中に記載している。
3. 北口遺跡(KG2012-1)の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任 村上 始・事務職員 實盛良彦を担当者として実施した。中野遺跡(NN2011-1)の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主幹 野島 稔の指導のもと、主査 村上 始・事務職員 實盛良彦(肩書きはいずれも当時)を担当者として実施した。
4. 北口遺跡(KG2012-1)の発掘調査の実施にあたっては廣谷利雄氏・地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。中野遺跡(NN2011-1)の発掘調査実施にあたっては丹治尋好氏・地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定・木製品の写真撮影などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、大阪府教育委員会文化財保護課、櫻井敬夫氏、瀬川芳則氏(元関西外国语大学教授)、渡辺晃宏氏・馬場 基氏・山本祥隆氏・中村一郎氏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)、野島 稔氏(四條畷市立歴史民俗資料館館長)、佐野喜美氏(前四條畷市立歴史民俗資料館館長)、古山明日香氏(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)。(順不同)
6. 出土遺物の整理・図面作成などは、四條畷市教育委員会社会教育課主任 村上 始・事務職員 實盛良彦が、酒井圭二、田伏美智代、船橋 勉の協力を得て行った。
7. 本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行った。文責者については、それぞれの文末に記載している。
8. 発掘調査で出土した遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中のレベルは、T.P.(東京湾平均海面)を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 須恵器の編年については、田辺昭三のもの(田辺 1981)と中村浩のもの(中村 2001)を併記した。中世土器の編年は、中世土器研究会のもの(中世土器研究会編 1995)に依拠した。

本 文 目 次

例 言・凡 例

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 ······	5
第1節 遺跡の位置と既往の調査	
第2節 周辺の歴史的環境	
第2章 北口遺跡（KG 2012－1）調査の経過 ······	10
第1節 調査の経過	
第3章 北口遺跡（KG 2012－1）調査の成果 ······	11
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第4章 北口遺跡（KG 2012－1）調査のまとめ ······	20
第1節 調査のまとめ	
第2節 北口遺跡3次調査の関連成果と北口遺跡の位置付け	
第5章 中野遺跡（NN 2011－1）調査の経過 ······	22
第1節 調査の経過	
第6章 中野遺跡（NN 2011－1）調査の成果 ······	23
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第7章 中野遺跡（NN 2011－1）調査のまとめ ······	33
第1節 調査のまとめ	
参 考 文 献 ······	34
写 真 図 版	
報 告 書 抄 錄	

挿 図 插 表 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 ······	7
第2図 調査地区位置図（KG 2012－1） ······	10
第3図 調査地区平面図・断面図（KG 2012－1） ······	13
第4図 出土遺物（KG 2012－1）（1） ······	15
第5図 出土遺物（KG 2012－1）（2） ······	17
第6図 出土遺物（KG 2012－1）（3） ······	19
第7図 北口遺跡3次調査出土の棒形器 ······	20

第8図 調査地区位置図 (NN 2011-1) ······	22
第9図 調査地区平面図・断面図 (NN 2011-1) ······	25~26
第10図 出土遺物 (NN 2011-1) (1) ······	27
第11図 出土遺物 (NN 2011-1) (2) ······	29
第12図 出土遺物 (NN 2011-1) (3) ······	31
第1表 四條畷市教育委員会発行の埋蔵文化財調査報告書一覧 ······	36

写 真 図 版 目 次

- 写真図版 1 1. 調査前現況 (北東側から)
 2. 遺構面検出状況 (北西側から)
- 写真図版 2 1. 遺構面検出状況 (北側から)
 2. 遺構全景 (東側から)
- 写真図版 3 1. 遺構全景 (北西側から)
 2. 土坑 22 遺物出土状況 (北東側から)
- 写真図版 4 1. 土坑 18 遺物出土状況 (北側から)
 2. 土坑 14 遺物出土状況 (南側から)
- 写真図版 5 1. 調査前現況 (東側から)
 2. 遺構面検出状況 (南東側から)
- 写真図版 6 1. 遺構全景 (北側から)
 2. 遺構全景 (北西側から)
- 写真図版 7 1. 遺構全景 (西側から)
 2. 土坑 63 全景 (南側から)
- 写真図版 8 1. 土坑 63 全景 (北側から)
 2. 土坑 63 遺物出土状況 (東側から)
- 写真図版 9 1. KG 2012-1 出土遺物 (須恵器)
 2. KG 2012-1 出土遺物 (須恵器)
- 写真図版 10 1. KG 2012-1 出土遺物 (土師器)
 2. KG 2012-1 出土遺物 (石器・緑色凝灰岩石核)
- 写真図版 11 1. KG 1999-1 出土遺物 (須恵器・土師器・製塙土器)
 2. KG 1999-1 出土遺物 (菅玉・緑色凝灰岩石核)
- 写真図版 12 1. NN 2011-1 出土遺物 (土師器)
 2. NN 2011-1 出土遺物 (瓦器・瓦質土器・須恵器)
- 写真図版 13 1. NN 2011-1 出土遺物 (磁器)
 2. NN 2011-1 出土遺物 (石製品)
- 写真図版 14 1. NN 2011-1 出土遺物 (木簡 赤外線写真)

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と既往の調査

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の四條畷地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市諏良川・清滝川などの中小河川によって開かれている。北口遺跡は、この山系西側の最低地部に位置する遺跡、中野遺跡は、山系西側の山裾部に位置する遺跡である。

北口遺跡

北口遺跡は、四條畷市岡山2丁目・5丁目に所在する古墳時代の集落跡である。この遺跡は1976年に今回の調査地の道路を挟んだ南東側の地点で宅地開発に伴って発見し、古墳時代の集落を調査した。1988年には集合住宅の建設に伴って2次調査を行い、古墳時代の集落を検出した。1999年には今回の調査地区的南側でマンション建設に伴って3次調査を行い、古墳時代中期の集落を検出した。2011年には、社会福祉施設建設に伴って4次調査を行い、中世から続く耕作地跡を検出した（村上・實盛2013b）。今回の調査は、北口遺跡の調査としては都合5次目に当たるものである。

中野遺跡

中野遺跡は、四條畷市中野本町・中野新町・中野一～三丁目に広がる遺跡で、古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1977年に大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴い発見され、中世の石組井戸などや、古墳時代中期の大溝が見つかった（野島1977、1986b）。この大溝からは朱塗りの壺や滑石製玉類、馬の下顎骨等が出土している（野島1986b、四條畷市教育委員会編2004）。またその後の二次調査では、隅丸方形の周溝状遺構を検出し、多量の漆が入った須恵器把手付碗や製塙土器等が出土している（野島1977、1978c、1986b）。

同年からは国道163号の拡幅工事に伴う調査が始まり、数次にわたって調査が行われた（野島1978a、西尾1987、1988、村上2000、2006）。1977～1978年の調査では、平安時代～室町時代の集落跡が確認され、室町時代の石組井戸から花崗岩の石臼が出土した（野島1978a）。この調査では硬玉製勾玉など古墳時代の遺物も出土している。1986年の調査でも中世の集落跡を確認したほか、古墳時代中期～後期の大溝から人物埴輪片や滑石製玉類、舟形木製品などが出土した（西尾1987）。1987～1988年の調査では古墳時代中期後半の井戸から乗せられた状態で馬頭骨が出土した（西尾1988）。井戸廃絶時に犠牲とされたものと考えられている（四條畷市教育委員会編2004）。1994年の調査では、古墳時代後期前半の落込から滑石製子供勾玉などが出土した（村上2000）。1996年の調査では奈良時代末～平安時代ごろの方形横板井戸を検出し、井戸内から「日置」と墨書きされた土師器壺が出土した（村上2006）。

この間他の開発に伴う調査も多く行われており、1977年の旧国鉄片町線（現JR学研都市線）複線化工事に伴う調査では古墳時代後期の掘立柱群を検出している（野島1977）。1983・1985年の民間開発に伴う調査でも古墳時代の遺物が出土している（野島・前田1984、野島1986a）。1985年のマンション建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の井戸を検出し、井戸内からは石製玉類や多量の製塙土器などが出土した（野島1986b）。1986年の倉庫・事務所建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴住居等を検出し、井戸から馬形木製品が出土した（松岡1987）。1989年度の公共下水道工事に伴う調査では、奈良時代の青銅製鉢帯（丸鞆）が出土した（野島1990）。1991～1992年の市役所東別館新築工事に伴う調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭ごろの方形縦板枠井戸を検出し、その底部の井戸枠に使われていた曲物には「應保二年 如月廿日」の墨書きがあった（村上2003b）。また溝からは青銅製鉢帯（巡方）や長年大宝が出土した。1993年のガソリンスタンド建設に伴う調査では横穴式石室を検出している（村上2006）。石室は床面のみの残存であったが、玄室から漢道へ延びる石組排水溝を確認した。

2007年から2009年にかけて主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴って2次にわたって行った調査では古墳時代の区画溝を検出し（村上・實盛2013a）、隣接する古墳時代祭祀遺跡である奈良井遺跡とのつながりが明らかになってきた。

第2節 周辺の歴史的環境

北口遺跡、中野遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物が見つかっている（第1図）。

旧石器時代 講良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・縫石刃・削器・彫器などが出土している（櫻井 1972）。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている（片山 1967a）。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形槍先形尖頭器が出土している（野島・藤原・花田 1976）。

縄文時代 縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡（野島 1978b）、四條畷小学校内遺跡（野島 1994c）、木間池北方遺跡（村上 1997a）などで見つかっている。讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている（井上ほか編 2003、佐伯ほか編 2007、井上編 2008 等）。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている（野島 1978b、1988）。

砂遺跡では中期から晩期の集落跡が見つかっている（宮野 1992、四條畷市教育委員会編 2008）。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の講良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧をはじめ、土偶などの祭祀具、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている（片山 1967b、桜井 1972、宮野 1992、野島編 2000）。

弥生時代 弥生前期初頭の土器が、2005年の調査で縄文晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡で見つかっている（中尾ほか編 2009）。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稻作の初現を示す遺物として重要である。讃良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地の集落が検出されている。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点的集落である。前期では北部九州系大形壺（板付Ⅱ式）の出土や（野島 1984）、集落の検出がある（村上 2001f）。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している（辻本 1987、野島 1987a、野島 1994a、阿部 1999）。焼失竪穴住居や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品やト骨・銅鐸の舌や播磨地城の土器などが出土している（野島 1994a、村上・實盛 2011）。また 2011 年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、竪穴住居群や方形周溝墓などが検出され（野島 1987a、阿部 1999）、丹後系・近江系・出雲・山陰系の土器類、鉄片・鉄諒などを含む多くの遺物が出土している（三好ほか 2007）。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治 44 年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸 2 口が出土したと伝えられ（梅原 1985）、現在関西大学が所蔵している。

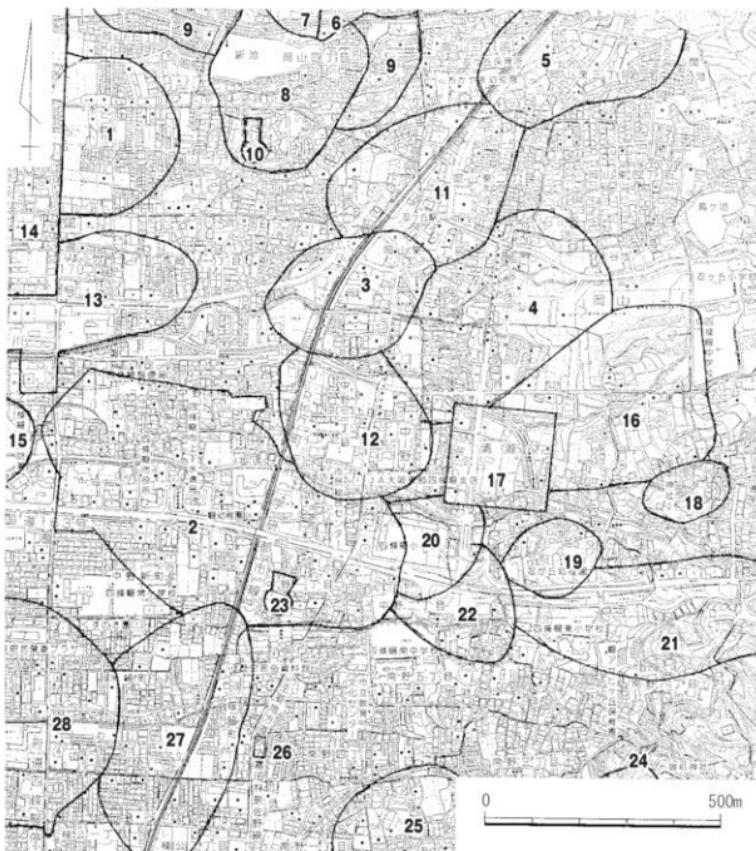
鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が 5 基見つかっている（野島 1994b）。1 号方形周溝墓には埴丘のほぼ中に埋葬施設が 1 基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2 号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島 1994c）、藤屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編 2012）、中野遺跡で後期の遺構が検出されている（野島 1986b）。

古墳時代 講良川流域で古墳時代前期中頃に全長約 87 m の前方後円墳である忍岡古墳が築造されている（梅原 1937）。主体部は竪穴式石室（石槨）で、碧玉製の車輪石・鍬形石・紡錘車・鉄劍・鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴う前期の集落は不明な点が多いが、讃良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている（井上編 2008、近藤ほか編 2006、佐伯ほか編 2007）。

中期の古墳としては、全長約 62 m の前方後円墳である幕ノ堂古墳があり、立会調査で円筒埴輪片が出土している（野島 1997c、櫻井・佐野・野島 2006）。忍ヶ丘駅前 1 号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している（野島 1993a、1997a）。清滝古墳群（野島 1980a）や大上古墳群、更良岡山古墳群（野島 1981）などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。中でも城遺跡内の大上 3 号墳は全長約 45 m ある



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 北口遺跡 | 2. 中野遺跡 | 3. 南山下遺跡 | 4. 岡山南遺跡 |
| 5. 坪井遺跡 | 6. 讀良川床遺跡 | 7. 讀良寺跡 | 8. 更良岡山古墳群 |
| 9. 更良岡山遺跡 | 10. 忍岡古墳 | 11. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 12. 奈良田遺跡 |
| 13. 奈良田遺跡 | 14. 讀良郡条里遺跡 | 15. 鎌田遺跡 | 16. 清瀧古墳群 |
| 17. 正法寺跡 | 18. 国中神社内遺跡 | 19. 大上遺跡 | 20. 四條駅小学校内遺跡 |
| 21. 城遺跡 | 22. 木間池北方遺跡 | 23. 墓ノ堂古墳 | 24. 近世墓地 |
| 25. 南野遺跡 | 26. 伝和田賢秀墓 | 27. 南野米崎遺跡 | 28. 雁屋遺跡 |

後期の帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と埴丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した（村上 2006）。清滻古墳群 2 号墳は、直径 20 m の円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島 1980a）。大上 1 号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盜掘されていたが、金銅装中空耳環が 1 点出土した（野島 1999、四條畷市教育委員会編 2002）。

JR 忍ヶ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島 2006、2010 等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島 1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土していて（野島 1982）、家形埴輪に伴って左足用の木製下駄も出土している（野島 1979、1982、瀬川 1992）。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われていて、奈良田遺跡（野島 1980c、野島・村上 2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上 2000 等）、城遺跡・大上遺跡（村上 2006）、南野米崎遺跡（野島 1985、四條畷市教育委員会編 2004）などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讚良郡条里遺跡で 5 世紀初頭の馬骨の出土が見られ（中尾ほか編 2009）、藤屋北遺跡では馬具の鎧・ハミ・鞍や、準構造船を転用した井戸枠、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる（岩瀬ほか編 2010、岩瀬編 2012）。鎌田遺跡では溝からシリザサラや木棟、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し（村上 2001c、d、e）、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している（野島 1980b、野島・村上 2000、野島・村上・實盛 2012）。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讚良郡条里遺跡では水田跡が見つかっている（野島 1993b、中尾ほか編 2009 等）。

古代以降 正法寺跡は、7 世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である（大阪府教育委員会編 1970）。一方創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった（村上 2001a）。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田 1977）、塔は石積みの造構を伴っていた（大阪府教育委員会編 1970）。また回廊の西南部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の鶴尾片が出土している（野島・村上 2002）。

讚良寺跡は 1969 年に部分的に調査されており、7 世紀の創建であることが分かっている（桜井 1972、櫻井・佐野・野島 2006、2010）。正法寺跡のものと同様の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しているが（野島編 2000）、文様に型起因の摩耗がみられ、讚良寺のものが後に作られたと考えられている（野島 1997b）。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡が見つかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれていて、木間池北方遺跡で円面鏡や土器と共に土馬が 7 体出土した（村上 2006）。木間池北方遺跡で「口万呂」（村上 2006）、南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出土している（野島 1995）。

讚良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される（中尾・山根編 2009）。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡（村上 2000）、木間池北方遺跡（村上 2006）、藤屋北遺跡（岩瀬ほか編 2010）などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書きされた土師器坏や（村上 2006）、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書き物井戸枠が出土している（村上 2003）。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されている（野島・藤原・花田 1976、野島 1987b）、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書き土器が出土している（野島 1987a）。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滻街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡（村上 2003a）、南山下遺跡（野島・村上 2001、村上 2001b）、岡山南遺跡（野島・藤原・花田 1976、野島 1982、野島・前田 1984、野島 1987b、村上 2004、

村上・實盛 2013a)、中野遺跡（野島 1977、1986b、西尾 1987）、忍ヶ丘駅前遺跡（野島 1983、村上 1997b)、四條畷小学校内遺跡（村上 2000)、大上遺跡（村上 2006) 木間池北方遺跡（村上 1997a)、南野遺跡（野島 1995)、郡屋北遺跡（岩瀬ほか編 2010)、南野米崎遺跡、楠公遺跡、葦屋遺跡等で集落跡等が見つかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壙墓が見つかっていて（野島 1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一部を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛山城跡はこれまでに大東市教育委員会によって調査が行われ、土星や柵の跡が検出されている（黒田 1989)。平成 23 年度には城跡の詳細な綿張図が測量・作成されている（村上・實盛編 2013、黒田 2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013)。

（實盛良彦）

第2章 北口遺跡（KG 2012-1）調査の経過

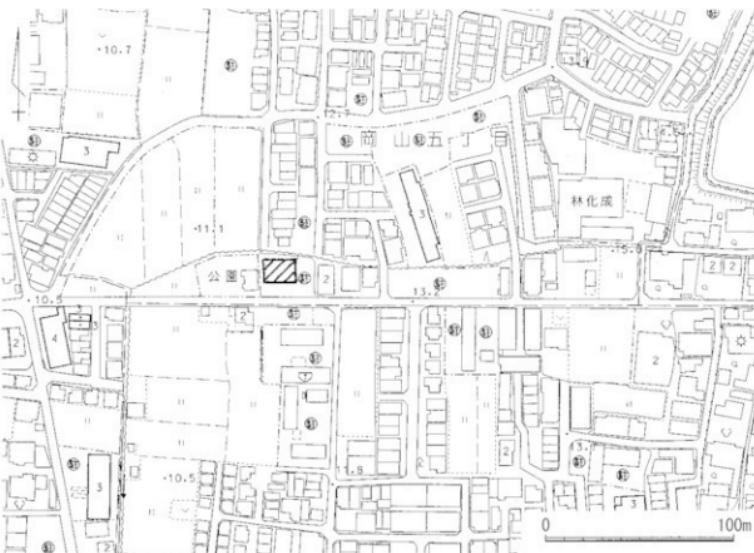
第1節 調査の経過

北口遺跡は、四條畷市岡山2丁目と5丁目に所在し、南北約350m・東西250mの範囲に広がる遺跡で、主に古墳時代の集落跡である。この遺跡は昭和51(1976)年に今回の調査地の道路を挟んだ南東側の地点で宅地開発に伴って発見し、古墳時代の集落を調査した。昭和63(1988)年には集合住宅の建設に伴って2次調査を行い、古墳時代の集落を検出した。平成11(1999)年には今回の調査地区的南側でマンション建設に伴って3次調査を行い、古墳時代中期の集落を検出した。平成23(2011)年には、今回の調査地区的西側で社会福祉施設建設に伴って4次調査を行い、中世から続く耕作地跡を検出した（村上・實盛2013b）。今回の調査は、北口遺跡の調査としては都合5次目に当たるものである。

四條畷市岡山5丁目621番1の一部において共同住宅の建設工事が計画され、その地域が周知遺跡である北口遺跡の範囲内であったため、平成24(2012)年10月19日付で、廣谷利雄氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは平成24年11月15日付け教委文第1-3652号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成24年11月2日に、開発地域内に1か所のトレンチを設定し確認調査を実施し、中世の包含層、古墳時代の包含層と遺構を確認した。その結果をもって開発者と協議を行い、開発工事によって遺跡が破壊される建物予定地の発掘調査を実施することとなった。調査地区的規模は東西約22m、南北約10m、調査面積は約225m²で、調査期間は平成24年11月26日から同年12月7日までであった。

調査は確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。(實盛)



第3章 北口遺跡（KG 2012-1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区の南隣は東西方向に市道が通じており、調査前の現状である宅地にするため、その市道の高さまで耕土上に約0.6～0.8mの盛土がされていた。約0.2mの耕土下には、約0.1mの床土が貼られている。その下層は、中世の包含層と遺構（鋪溝）の埋土である約0.1～0.5mの緑灰色砂質土であった。その下層は、古墳時代中期の包含層と遺構の埋土である約0.1～0.3mの黒褐色砂質土があり、その下層は地山の一部と考えられる土層で、緑灰色砂質土や黄色粘質土に黒褐色砂質土が混入する約0.1～0.2mのものであった。その下層は、黄色粘質土の地山面であった。これら地山と地山の可能性がある土層の上面が遺構面であり、古墳時代中期の遺構を検出した。

以下、各土層の説明を述べる（第3図）。

第1層：盛土

第2層：耕土

第3層：床土

第4層：中世包含層と遺構の埋土 緑灰色砂質土（7.5G Y 6/1）

第5層：中世包含層 明オリーブ灰色砂質土（7.5G Y 7/1）

第6層：古墳時代中期の包含層と遺構の埋土 黒褐色砂質土（2.5Y 3/1）粘性少しあり。

第7層：緑灰色砂質土（7.5G Y 6/1）に第6層が混入。地山の一部である可能性がある。

第8層：第9層に第6層が混入。地山の一部である可能性がある。

第9層：黄色粘質土（2.5Y 8/6）地山

（村上 始）

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、すべて古墳時代中期の遺構で、井戸1基、溝4本、土坑27基、Pit18基、落込み1基がみられた（第3図）。遺構面の標高は調査地区北東隅でT.P.+11.500m、北西隅でT.P.+11.140mであった。以下、主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。

井戸1 東西の長さ3.0m、南北の長さ3.3m、深さが最大0.586mで隅丸方形を呈する素掘の井戸である。上端がT.P.+11.343m、下端が最深部でT.P.+10.757mであった。調査地区内のほぼ中央に位置する（写真図版2-2）。須恵器無蓋高杯・壺（第4図-14・15）、サスカイト石核（第6図-28）などが出土した。

土坑13 長径1.6m、短径1.2mの楕円形である。深さは0.229mである。上端の標高はT.P.+11.377m、下端はT.P.+11.148mであった（写真図版3-1）。須恵器壺身（第4図-1・2）、土師器碗（第5図-19）などが出土した。

土坑14 南半部を土坑13によって切られているが、長径2.2mの不整円形を呈する。深さは0.113mである。落込み1の底面で検出した遺構であり、上端の標高はT.P.+11.223m、下端はT.P.+11.110mであった（写真図版4-2）。須恵器壺蓋・壺身（第4図-3・4）などが出土した。

土坑18 直径0.8mの円形である。東半を確認調査時のトレンチによって失っている。深さは0.123mである。落込み1の底面で検出した遺構であり、上端の標高はT.P.+11.296m、下端はT.P.+11.173mであった（写真図版4-1）。須恵器壺蓋・壺身・高杯蓋（第4図-5～7）などが出土した。

土坑16 直径0.8mの円形である。一部を他の土坑によって切られている。深さは0.167mである。落込み1の底面で検出した遺構であり、上端の標高はT.P.+11.365m、下端はT.P.+11.198mであった（写真図版3-1）。土器類のほかサスカイト製のスクレイバー（第6図-27）などが出土した。

土坑20 直径1.2mの円形である。深さは0.079mである。一部を土坑18・21によって切られている。落込み1の底面で検出した遺構であり、上端の標高はT.P.+11.270m、下端はT.P.+11.191mで

あつた（写真図版3-1）。須恵器坏身（第4図-8）、土師器ミニチュア土器（第5図-21）などが出土した。

土坑21 残存径は1.8mあり、短径約2mの楕円形を呈すると思われるが、大半を井戸1に切られしており、長径は不明である。深さは0.15mである。落込み1の底面で検出した遺構であり、上端の標高はT.P.+11.246m、下端はT.P.+11.096mであった（写真図版3-1）。須恵器坏身（第4図-9）などが出土した。

土坑22 東西の残存長2.2m、南北の長さ2mで隅丸方形を呈する。深さは0.145mである。南東部を井戸1・土坑20・21によって切られている。落込み1の底面で検出した遺構であり、上端の標高はT.P.+11.258m、下端はT.P.+11.113mであった（写真図版3-2）。須恵器坏身・把手付碗・座卓（第4図-10～13）、土師器碗（第5図-20）などが出土した。

Pit15 東西の残存長2.2m、南北の長さ2mで隅丸方形を呈する。上端の標高はT.P.+11.410m、下端はT.P.+11.193mであった（写真図版2-2）。須恵器無蓋高坏の体部片（第5図-16）などが出土した。

落込み1 東西の長さ5.7m、南北の長さ6.8mある不整形の遺構である。深さ0.164mを測る。北西隅における上端の標高はT.P.+11.370m、下端の標高はT.P.+11.206mであった。落込み1の底面で検出した遺構は落込み検出面では切り合ひがない、この落込みは皿状に窪んでいた部分に上層包含層と同質の黒褐色砂質土が堆積したものである（写真図版2-2）。須恵器壺・無蓋高坏（第5図-17・18）、土師器高坏・ミニチュア土器（第5図-22～25）、緑色凝灰岩石核（第6図-28）などが出土した。

（實盛）

第3節 出土遺物

1. 須恵器

土坑13出土遺物

1 坏身 口径：11.1cm。器高：5.2cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：9/10。I型式4段階（TK 23型式）。出土標高はT.P.+11.256mである。（第3図-1、第4図-1、写真図版9-1-1）

2 坏身 口径：11.0cm（復元）。器高：5.1cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外・断面は灰色（N 5/）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。I型式4段階（TK 23型式）。（第4図-2、写真図版9-1-2）

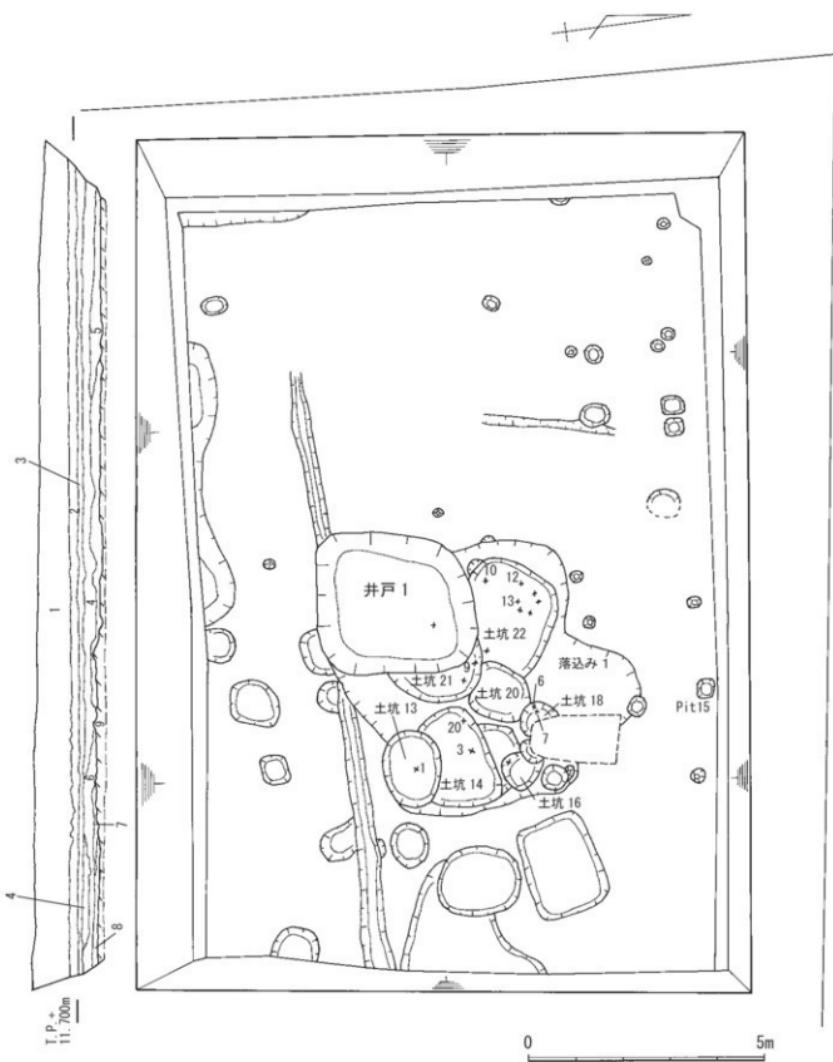
土坑14出土遺物

3 坏身 口径：11.4cm。器高：4.7cm。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・断面は灰白色（N 7/）、外面は灰色（N 6/）。胎土：密。直径1mm以下の白色・黒色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁受部の約1/2に他の製品の溶着痕がみられる。I型式4段階（TK 23型式）。出土標高はT.P.+11.290mである。（第3図-3、第4図-3、写真図版9-1-3）

4 坏蓋 口径：12.8cm（復元）。器高：4.1cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：やや密。直径3mm以下の石英・長石・赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：1/5。I型式4段階（TK 23型式）。（第4図-4、写真図版9-1-4）

土坑18出土遺物

5 坏蓋 口径：12.8cm。器高：4.5cm。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内面はにぶい橙色（7.5YR 7/3）、外面は灰白色（N 7/）、断面は橙色（7.5YR 6/6）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：2/3。I型式4段階（TK 23型式）。（第4図-5、写真図版9-1-5）



第3図 調査地区平面図・断面図 (KG 2012-1)

6 高環蓋 口径：12.4cm。器高：4.8cm。厚さ：0.2～1.1cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1mm程度の黑色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。I型式4段階（TK 23型式）。出土標高はT.P. + 11.331mである。（第3図-6、第4図-6、写真図版9-1-6）

7 环身 口径：11.2cm。器高：5.0cm。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内面は青灰色（5B 6/）、外・断面は灰色（N 6/）。胎土：やや粗。直径2mm以下の石英・長石・赤色鉱物・黒色鉱物を多く含む。焼成：やや良好。残存度：1/2。I型式4段階（TK 23型式）。出土標高はT.P. + 11.207mである。（第3図-7、第4図-7、写真図版9-1-7）

土坑20出土遺物

8 环身 口径：12.4cm（復元）。器高：4.3cm。厚さ：0.25～0.6cm。色調：内面は灰白色（N 7/）、外面は青灰色（5B 6/）、断面は灰色（N 5/）。胎土：やや密。焼成：やや良好。残存度：2/5。I型式4段階（TK 23型式）。（第4図-8、写真図版8-2-8）

土坑21出土遺物

9 环身 口径：9.8cm。器高：4.4cm。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内・外は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：完形。I型式5段階（TK 47型式）。出土標高はT.P. + 11.227mである。（第3図-9、第4図-9、写真図版9-1-9）

土坑22出土遺物

10 环身 口径：10.0cm。器高：4.2cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外・断面は灰色（7.5Y6/1）。胎土：粗。直径5mm以下の長石・石英などを著しく多く含む。焼成：良好。残存度：完形。I型式3段階（TK 208型式）。出土標高はT.P. + 11.243mである。（第3図-10、第4図-10、写真図版9-1-10）

11 手付碗 口径：8.2cm（復元）。器高：6.2cm。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は明赤灰色（2.5YR 7/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：7/10。内面と外面肩部に降灰（灰白色N 7/）がみられる。I型式3段階（TK 208型式）。（第4図-11、写真図版9-2-11）

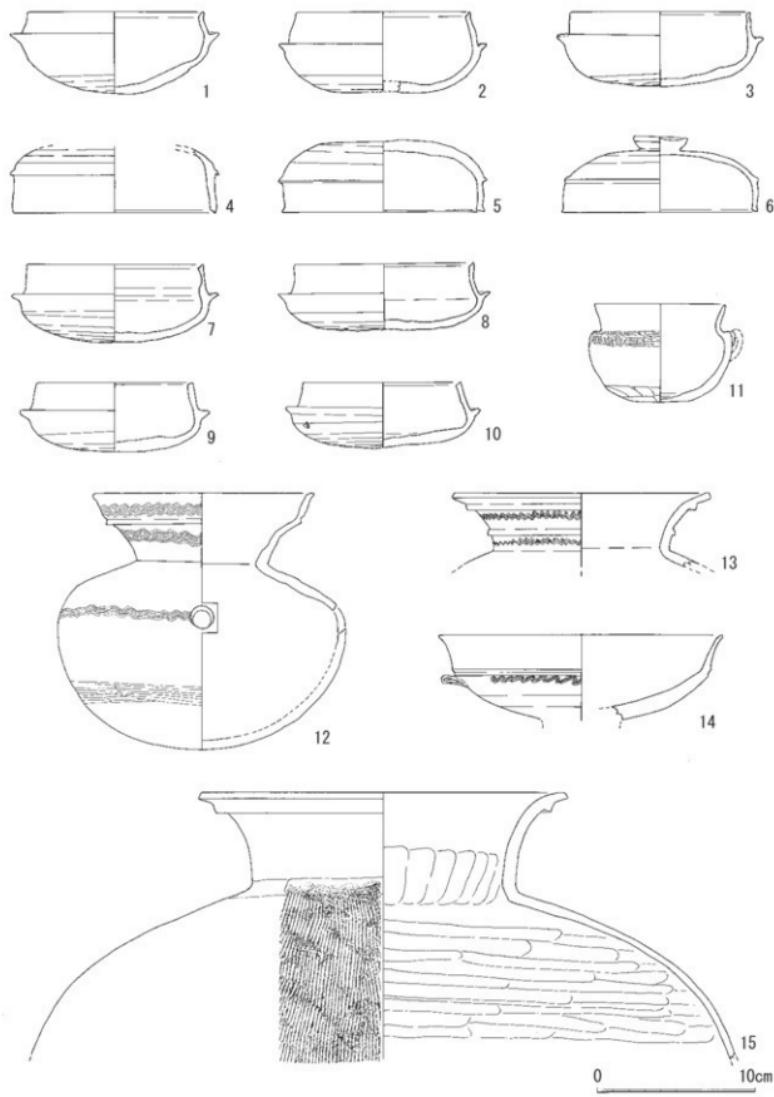
12 麓 口径：14.0cm。器高：16.3cm。最大幅：18.2cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は明赤灰色（2.5YR 7/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部内面と体部肩部に降灰（灰白色N 7/）がみられる。I型式2段階（TK 216型式）。出土標高はT.P. + 11.336mである。（第3図-12、第4図-12、写真図版9-2-12）

13 袋 口径：16.4cm（復元）。器高：4.7cm（残存）。厚さ：0.5～0.7cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：密。直径3mm以下の石英・長石・黒色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：小片。一部に自然釉（灰色7.5 Y 6/1）が付着。I型式2段階（TK 216型式）。出土標高はT.P. + 11.241mである。（第3図-13、第4図-13、写真図版9-2-13）

井戸1出土遺物

14 無蓋高环 口径：18.0cm（復元）。器高：5.4cm（残存）。厚さ：0.2～1cm。色調：内面は降灰により黄灰色（2.5Y 6/1）・外面は灰色（N 4/）・断面は赤灰色（10R 6/1）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。I型式2段階（TK 216型式）。（第4図-14、写真図版9-2-14）

15 袋 口径：23.0cm（復元）。器高：16.9cm（残存）。厚さ：0.4～1.1cm。色調：内面は褐灰色（5YR 6/1）・外面は暗赤褐色（2.5YR 3/3）、断面は灰赤色（7.5YR 6/2）。胎土：密。直径1～3mmの小石を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。胴部外面に降灰（明赤灰色7.5 R7/1）がみられる。I型式2段階（TK 216型式）。（第4図-15、写真図版9-2-15）



第4図 出土遺物 (KG 2012- 1) (1)

Pit15 出土遺物

16 無蓋高杯 厚さ：0.5～0.7cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は灰色（N 5/）、断面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。上部の凸線の上位に波状文が、上下凸線の間には円形刺突文と連続した長方形の刺突文を組み合わせた文様が施されている。（第5図-16、写真図版9-2-16）

落込み1 出土遺物

17 瓢 口径：19.0cm（復元）。器高：6.0cm（残存）。厚さ：0.5～1.1cm。色調：内・外・断面は灰白色（N 7/）。胎土：やや密。直径2mm以下の石英・長石・黒色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：小片。I型式2段階（TK 216型式）。（第5図-17、写真図版9-2-17）

18 無蓋高杯 口径：16.0cm。底径：10.8cm。器高：13.1cm。厚さ：0.2～1.1cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）、断面は赤灰色（2.5YR 6/1）。胎土：密。直径1～3mmの白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。杯部外面と脚部内面に降灰（灰オリーブ色5Y 6/2）がみられる。脚部には4方向に台形の透かしが開けられている。杯部には両側に把手が付き、把手の上部には直径5mm程度の粘土粒を貼り付けている。I型式2段階（TK 216型式）。（第5図-18、写真図版9-2-18）

2. 土器

土坑13 出土遺物

19 碗 口径：12.8cm。器高：5.4cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は黄橙色（7.5YR 7/8）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：完形。（第5図-19、写真図版10-1-19）

土坑14 出土遺物

20 高杯 口径：17.3cm。底径：12.0cm。器高：12.5cm。厚さ：0.3～1.3cm。色調：内・外面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：密。金雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：5/6。5世紀中頃～後半。出土標高はT.P.+11.323mである。（第3図-20、第5図-20、写真図版10-1-20）

土坑20 出土遺物

21 ミニチュア土器 口径：5.0cm（復元）。器高：3.6cm（残存）。厚さ：0.2～1.0cm。色調：内・外・断面は黄橙色（7.5YR 7/6）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。（第5図-21、写真図版10-1-21）

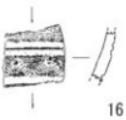
土坑22 出土遺物

22 碗 口径：13.0cm。器高：4.7cm。厚さ：0.5～0.6cm。色調：内・外面は黄橙色（7.5YR 7/8）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：完形。（第5図-22、写真図版10-1-22）

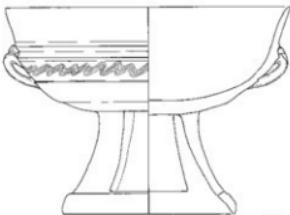
落込み1 出土遺物

23 ミニチュア土器 器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内面は灰色（N 4/）、外・断面は灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色・黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。（第5図-23、写真図版10-1-23）

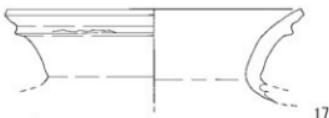
24 高杯脚部 底径：9.3cm。器高：6.5cm（残存）。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内面は橙色（7.5YR 7/6）、外面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）、断面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色粒子を多く、金雲母を極少量含む。焼成：良好。残存度：脚部のみ2/3。（第5図-24、写真図版10-1-24）



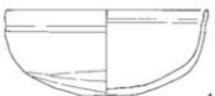
16



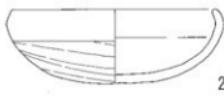
18



17



19



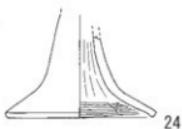
22



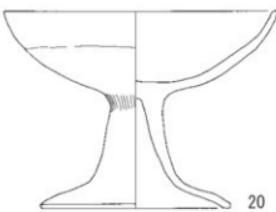
21



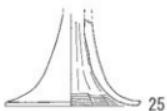
23



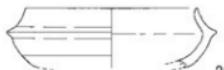
24



20



25



26

0 10cm

第5図 出土遺物 (KG 2012- 1) (2)

25 高杯脚部 底径：8.4cm。器高：5.8cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内面は橙色（7.5YR 7/6）、外面はにぶい褐色（7.5YR 5/4）、断面はにぶい橙色（7.5YR 6/4）。胎土：やや密。直径1mm以下の白色粒子を多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：脚部のみ2/3。（第5図-25、写真図版10-1-25）

包含層出土遺物

26 坯身 口径：10.8cm（復元）。器高：3.8cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内面は赤色（10R 5/8）、外面は赤橙色（10R 6/6）、断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：やや粗。直径3mm以下の石英・長石・赤色鉱物を多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/7。須恵器系土師器である。I型式1～2段階（TK 73～216型式）。（第5図-26、写真図版10-1-26）

（村上）

3. 石器

土坑16出土遺物

27 スクレイバー（搔器） 縦：4.75cm。横：7.25cm。厚さ：最大1.05cm。色調：灰色（N 5/）。サヌカイト製である。刃部は片面調整で、主要剥離面側に調整を施し刃部としている。図面の左上部分は自然面が残存している。弥生時代のものと思われる。（第6図-27、写真図版10-2-27）

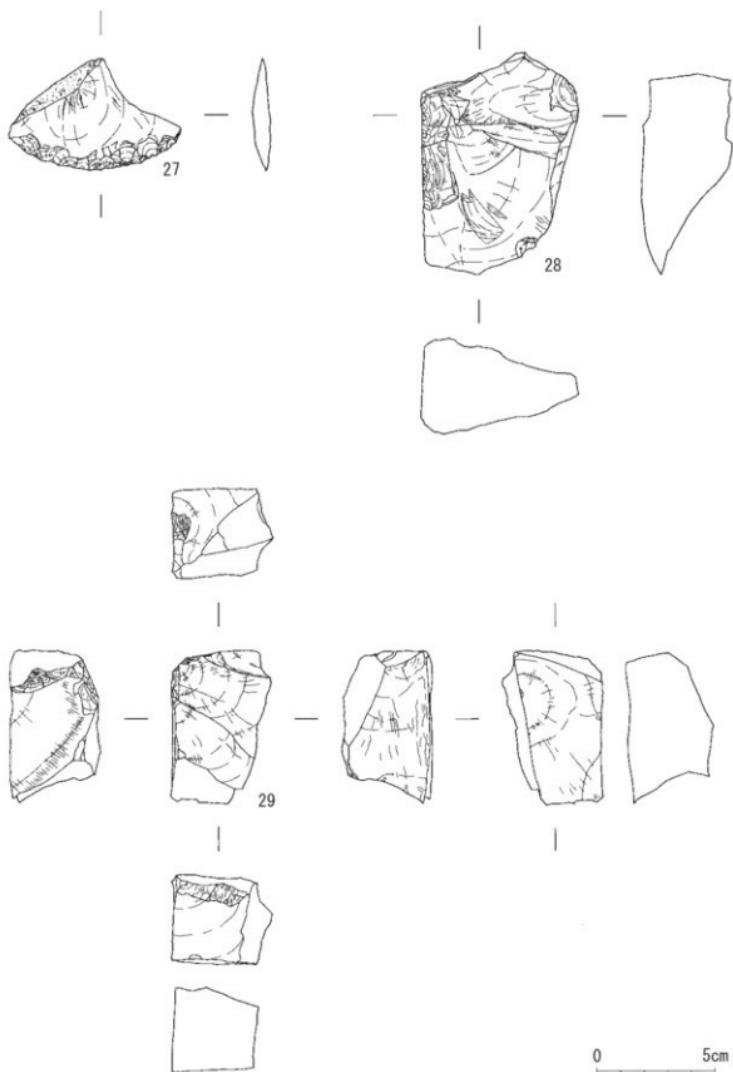
井戸1出土遺物

28 石核 長さ：9.5cm。幅：6.7cm。厚さ：4.1cm。色調：剥離面は灰色（N 5/）、自然面は黄灰色（2.5Y 6/1）。石材はサヌカイトである。裏面及び左側面には自然面が残存している。（第6図-28、写真図版10-2-28）

落込み1出土遺物

29 石核 長さ：6.5cm。幅：4.2cm。厚さ：3.6cm。色調：明緑灰色（10GY 7/1）。石材は緑色凝灰岩質である。自然面の残存部は見られない。古墳時代のものである。玉製品の製作用の石核と思われる。（第6図-29、写真図版10-2-29）

（實盛）



第6図 出土遺物 (KG 2012- 1) (3)

第4章 北口遺跡 (KG 2012- 1) 調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

北口遺跡の今回の調査で確認できたのは、古墳時代中期の集落であった。調査地区のほぼ中心には井戸を1基検出していて、この付近を中心多くの遺構を検出することが出来た。それらの遺構からは完形に近い遺物の出土が多く、これらの遺物はほぼ原位置を保っていたものとみられる。

調査地区的北半からはPit群を検出しており、具体的な構造の復元はできなかったが、掘立建物もしくは杭列等の構造物が存在したものとみられる。

出土した土器はおおむね5世紀代に納まるものであり、6世紀まで確実に降る須恵器の出土は遺構からはなかった。北口遺跡の集落は、5世紀代にその中心があるものとみられる。

また、出土遺物の中にはサヌカイト製のスクレイバーと石核も含まれていた。スクレイバーは弥生時代のものである可能性が高く、石核も同時期のものである可能性がある。周辺に弥生時代の集落が存在している可能性があるだろう。

出土遺物の中で特筆されるのは緑色凝灰岩質の石核である。この石核は落込み1から出土したものである。石核は全面に剥離面が見られるものであった。後述するように北口遺跡では過去の調査でも緑色凝灰岩質の石核が出土しており、玉製品の製作が行われた集落の可能性が高い。今回出土した石核はこれまで出土した中でも最も大型のもので、北口遺跡で玉作りが行われていたという想定を補強する裏付けとなった。今回の成果からみると、北口遺跡は古墳時代中期の5世紀に玉作りが行われていた集落であった可能性が高い。

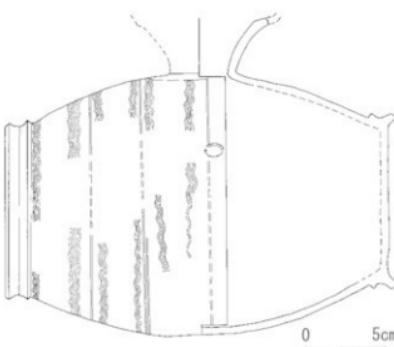
周辺の調査成果では、1999年の調査で検出した集落は後述するように今回の調査で検出した集落と同一集落である可能性が高い。一方、今回の調査地区的西側で行った2011年の調査(村上・實盛2013b)では、古墳時代の集落は検出されなかった。その理由は今回の調査成果と合わせて考えれば、2011年調査の区域は一段低く、低地部を耕作地等で利用していたところに分厚く洪水砂が堆積しているか、遺構面が中世以前に削平されているか、あるいは利用価値の低い遺構の希薄な場所であるかのいずれかのためと考えられるだろう。

(實盛)

第2節 北口遺跡3次調査の関連成果と北口遺跡の位置付け

北口遺跡の今回の調査では、緑色凝灰岩質の石核が出土し、北口遺跡が玉製品の製作が行われた可能性がある遺跡であることが明らかとなった。北口遺跡では、これまでにも幾度か調査が行われているが、その中でも今回の成果である玉作りに関連する遺物の出土をみている。そこで、本節では平成11(1999)年に行った3次調査での関連する成果について、概要を述べ、そこから北口遺跡の位置付けについて再確認してみたい。

北口遺跡の3次調査は、平成11(1999)年に今回の調査地区の南側でマンション建設に伴って行ったものである。この調査では、古墳時代中期の集落を検出した。調査では溝や土坑を検出して、溝から樽形甕が出土している(第7図・写真図版11-1)。この土器は口縁部が破損しているもののほぼ完形に復



第7図 北口遺跡3次調査出土の樽形甕

元でき、残存高 20.1cm、幅 24.7cm、厚さ 0.5cm のものである。I 型式 2 段階（TK 216 型式）のものとみる。

他の出土土器としては須恵器坏身、土師器高坏、製塙土器があげられる（写真図版 11-1）。須恵器坏身のうち図版右側のものは口径 10cm、高さ 5.8cm で、外面に波状文が施されている。図版左側のものは口径 9.7cm、高さ 4.7cm で、煙で燻されたような焼成である。いずれも I 型式 1 段階後半（TK 73 型式）のものとみる。土師器高坏は口径 12.1cm、底径 9.8cm、高さ 12.1cm で、脚部に多数の孔が穿たれている。製塙土器のうち図版右側のものは残存高 7.3cm で、外面にタタキ目がある。図版左側のものは残存高 7.2cm で、外面は無文である。

このような土器の出土から、古墳時代中期の集落であることが明らかとなった。製塙土器の出土は、北口遺跡の集落が一帯に広がる馬廻い関係の集落と一連で捉えられることを示唆している。

この調査においても、玉作り関連の遺物が出土している（写真図版 11-2）。図版左上は緑色凝灰岩質の石核である。溝からの出土で、長さ 3.2cm、幅 2.5cm、厚さ 2.2cm である。一部分の色調が異なっており、色の濃い部分は良質の碧玉様である。図版左下は緑色凝灰岩質の石核である。溝からの出土で、長さ 2.3cm、幅 1.8cm、厚さ 1.9cm である。図版右下は緑色凝灰岩質の剥片である。土坑からの出土で、長さ 1.6cm、幅 1.5cm、厚さ 0.5cm である。図版右上はいわゆる碧玉製の管玉である。溝からの出土で、長さ 2.4cm、最大径 0.4cm である。

このように、北口遺跡の 3 次調査では緑色凝灰岩質の石核・剥片が出土している。今回の調査成果と合わせれば、これまでに 4 点の石核・剥片が出土している一方、製品は碧玉製管玉 1 点のみである。製品よりも製作遺物の方が多い点は、北口遺跡が製品の製作を行い、流通させていた集落であったことを裏付けるものと言えるだろう。今回の調査と、3 次調査の成果は、時期的にも古墳時代中期に納まるものであり、玉作り関連の遺物が出土する点でも一致している。両調査で検出した集落は同一集落である可能性が高いと言えるだろう。以上のように、北口遺跡は古墳時代中期の 5 世紀に玉作りが行われていた集落であった可能性が高い。

北口遺跡周辺の遺跡では、讃良郡条里遺跡で滑石製品の生産が行われていたことが明らかにされているが（中尾ほか編 2009）、緑色凝灰岩や碧玉等を用いた製品製作遺跡は未発見であり、北口遺跡での玉作りが明らかになったことは、畿内における玉製品の流通を考える上で重要である。現時点ではまだ関連遺物の出土が少なく、製品製作の詳細な内容や、製作方法などは明らかではないが、今後北口遺跡の調査をさらに進めていくことで、製品製作の様相もさらに明らかになっていくであろう。今後の調査での資料の蓄積を待って、北口遺跡における玉生産の様相を検討していくこととしたい。

（實盛）

第5章 中野遺跡（NN 2011-1）調査の経過

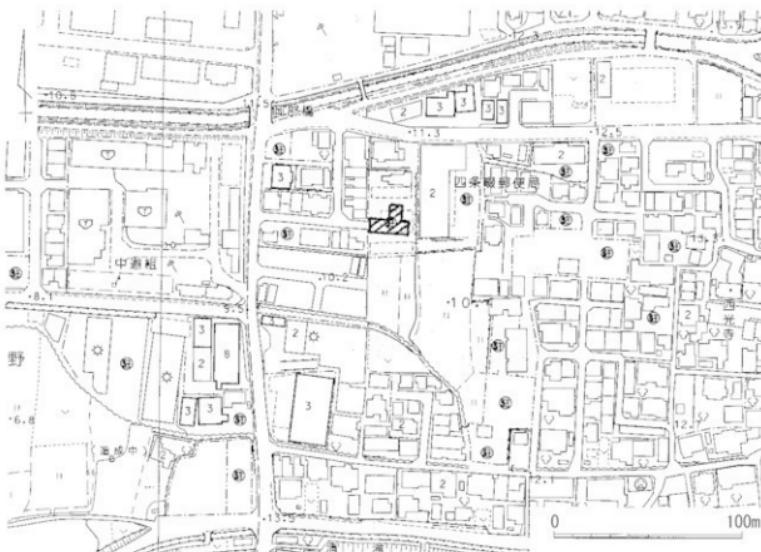
第1節 調査の経過

中野遺跡は、四條畷市中野本町を中心として東西約800m、南北約400mの範囲に広がる遺跡で、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の集落跡であり、これまでに数多くの発掘調査を行っている。

四條畷市中野本町278番1の一部において宅地開発工事が計画され、平成23(2011)年10月11日に設計者のK・T建築設計事務所から四條畷市建設部都市計画課を経由して大阪府住宅まちづくり部建築指導室長へ、建築基準法第42条第1項第5号の規定による道路位置指定についての協議申出があり、四條畷市建設部都市計画課から平成23年10月11日付で大阪府第1105号で四條畷市教育委員会社会教育部社会教育課へ、四條畷市開発指導要綱第5条の規定に基づく事前協議書の送付があった。この場所は周知遺跡である中野遺跡の隣接地であったため、遺跡が存在する可能性が高いと判断し平成23年10月17日付で四條畷教社第923号で、試掘調査が必要な旨の意見を回答した。

平成23年11月24日に開発者の丹治尋好氏から四條畷市教育委員会教育長へ土木工事等にかかる試掘調査依頼があり、平成23年12月13日に、開発地内に1か所のトレンチを設定し試掘調査を実施したところ、中世の遺物と遺構を確認した。その結果、四條畷市教育委員会教育長から大阪府教育委員会教育長へ平成23年12月20日付で四條畷教社第1241号で、平成12年教委文第572号に基づく埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議を依頼し、大阪府教育委員会教育長から平成23年12月26日付け教委文第9-15号で通知があり、中野遺跡の範囲拡大として大阪府文化財情報管理システムに登録された。

その結果により開発事業者と協議を行い、開発工事によって遺跡が破壊される道路予定地の発掘調査を実施することとなった。調査面積は約174m²で、調査期間は平成24(2012)年1月10日から同年1月31日までであった（第8図）。
（実盛）



第8図 調査地区位置図（NN 2011-1）

第6章 中野遺跡（NN 2011- 1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区の現状は、宅地である。周辺の状況から旧耕作地に約0.2～0.6mの盛土を行ったものと考えられるが、本来なら盛土下で確認できる耕土がみられなかった。これは、過去の造成の際に湿気などのことを考えて、旧耕土を除去したものと思われる。盛土下には、約0.1mの床土が部分的に残存していた。その下層は、近世の包含層である約0.04～0.1mの暗灰色砂質土であった。その下層は、中世の包含層である約0.1～0.6mの灰色砂質土があり、その下層は、中世の包含層と遺構の埋土である約0.2～0.5mの灰色砂質土であった。その下層は灰黄褐色粘質土の地山面で、その上面で平安時代末期から中世の遺構面を検出した。

以下、各土層の説明を述べる（第9図）。

- 第1層：盛土
第2層：床土
第3層：近世の包含層 暗青灰色砂質土 (10BG 4/1)
第4層：近世の包含層 灰色砂質土 (5Y 6/1)
第5層：中世包含層 灰色砂質土 (5Y 5/1)
第6層：中世包含層 掲灰色砂質土 (10YR 5/1)
第7層：中世包含層 灰色砂質土 (N 6/)
第8層：中世包含層 灰色砂質土 (N 5/)
第9層：中世包含層と遺構の埋土 黄灰色砂質土 (2.5Y 5/1)
第10層：中世包含層と遺構の埋土 灰色砂質土 (N 4/) に粗砂混入。
第11層：落込み 94 の埋土 にぶい黄褐色砂質土 (5YR 5/2)
第12層：落込み 94 の埋土 灰黄褐色砂質土 (10YR 5/2)
第13層：落込み 94 の埋土 灰白色粗砂 (2.5Y 7/1)
第14層：落込み 94 の埋土 灰黄褐色砂質土 (10YR 5/2) にシルト混入。
第15層：土坑 63 の埋土 灰黄褐色砂質土 (10YR 5/2)
第16層：土坑 63 の埋土 黑褐色砂質土 (10YR 3/2)
第17層：土坑 63 の埋土 暗灰色粘質土 (N 3/)
第18層：土坑 63 の埋土 オリーブ黒色粘土 (7.5Y 3/1)
第19層：土坑 63 の埋土 灰色砂質土 (7.5Y 5/1) に粗砂混入。
第20層：土坑 63 の埋土 灰色砂質土 (N 4/) に明青灰色シルト (10BG 7/1) の地山ブロック混入。
第21層：土坑 63 の埋土 灰白色砂質土 (2.5Y 7/1) に粗砂混入。
第22層：土坑 63 の埋土 第21層に明青灰色シルト (10BG 7/1) の地山ブロック混入。
第23層：土坑 63 の埋土 第18層と第21層の混合層。
第24層：土坑 63 の埋土 褐灰色粘質土 (10YR 4/1)
第25層：土坑 63 の埋土 灰白色粗砂 (N 8/)
第26層：地山 灰黄褐色粘質土 (10YR 5/2)
第27層：地山 明青灰色シルト (10BG 7/1)

(村上)

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、すべて平安時代から中世にかけての遺構で、合計117基の遺構があり、遺構の種類としては溝、土坑、落込みがみられた（第9図）。遺構面の標高は調査地区北東隅でT.P.+9.719m、南西部でT.P.+9.510m、南東部でT.P.+9.756mであった。以下、遺物を掲載した主な遺構について遺構の種類ごとに詳述する。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。

溝62 調査地区的中央東寄りで検出した。北東から南西へとやや弧を描くような形をした溝で、北端南端ともに調査地区外に延びている。検出できた規模は長さ約9.5m、北端部分の幅0.9m、南端部分の幅3.2m、深さは北端部分で10.5m、南端部分で16.1cmである。標高は北端部分の西側上端がT.P.+9.810m、東側上端がT.P.+9.762m、底部がT.P.+9.603mで、南端部分の西側上端はT.P.+9.705m、東側上端はT.P.+9.724m、その付近に位置する最底部はT.P.+9.555mであった（写真図版6-1・2）。青白磁合子蓋（第11図-44）などが出土した。

土坑63 調査地区東端で検出した。残存長で東西5.5m、南北6.5mの土坑である。深さは1.359mである。不整円形を呈すると思われるが、遺構の半分以上は調査地区外であり、全容は不明である。遺構の南側肩部に杭5本から成る杭列の痕跡が観察できた。遺構上端の標高はT.P.+9.762m、下端はT.P.+8.403mであった（写真図版7-2、8-1・2）。土師器皿（第10図-30～40）、瓦器碗・瓦質三足釜（第10図-41～43）、白磁・青磁碗（第11図-45～48）、須恵器甕・須恵器練鉢（第11図-50・51）、石製品、木製品（第12図）などが出土した。

土坑111 調査地区的中央東寄りの位置で検出した。東西1.3m、南北2.5mの隅丸長方形を呈する。深さは0.446mである。上端の標高はT.P.+9.785m、下端はT.P.+9.339mであった（写真図版6-1・2）。白磁碗（第11図-49）などが出土した。

（實盛）

第3節 出土遺物

1. 土師器

土坑63 出土遺物

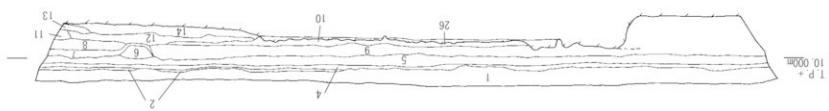
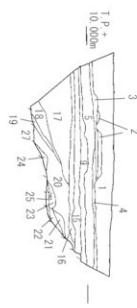
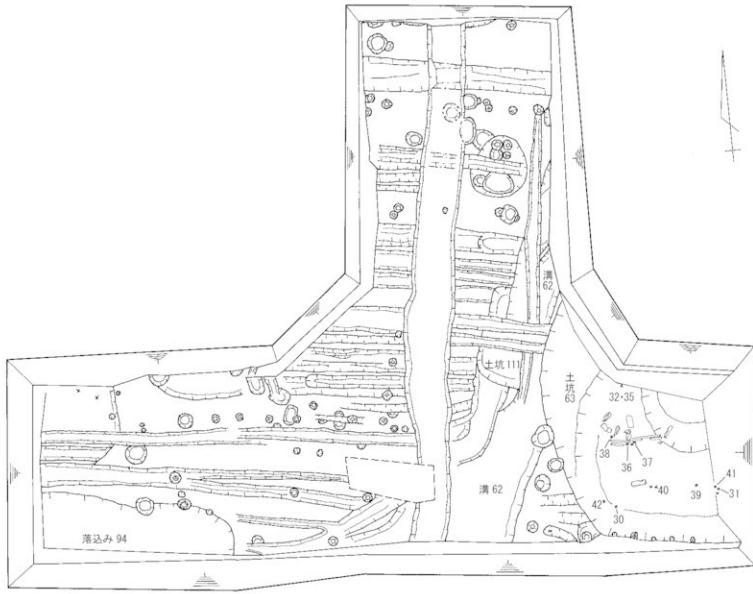
30 土師器皿 口径：9.4cm、器高：1.6cm、厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は灰黄色(2.5Y 7/2)。胎土：密。微細な雲母を多量に含む。焼成：良好。残存度：完形。Abタイプ。12世紀代のものである。出土標高はT.P.+9.219mである。（第9図-30、第10図-30、写真図版12-30）

31 土師器皿 口径：9.1cm、器高：1.3cm、厚さ：0.4cm。色調：内・外・断面は灰黄色(2.5Y 6/2)。胎土：密。微細な雲母を多量に含む。焼成：良好。残存度：1/2。内面の一部に煤（黒褐色2.5Y 3/1）が付着。灯明皿。Abタイプ。12世紀代のものである。出土標高はT.P.+9.078mである。（第9図-31、第10図-31、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-31）

32 土師器皿 口径：8.0cm、器高：1.5cm、厚さ：0.4～0.5cm。色調：内・外面は灰白色(5Y 7/1)、断面は灰黄色(2.5Y 6/2)。胎土：密。直径1mmの長石・雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。Abタイプ。12世紀代のものと思われる。出土標高はT.P.+9.219mである。（第9図-32、第10図-32、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-32）

33 土師器皿 口径：7.9cm、器高：1.4cm、厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は灰白色(5Y 8/1)、断面は灰黄色(2.5Y 6/2)。胎土：密。直径1mm以下の石英・雲母を含む。焼成：良好。残存度：3/5。内面に焼成前のヘラ等による線刻の記号がある。Abタイプ。12～13世紀代のものである。（第10図-33、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-33）

34 土師器皿 口径：8.3cm、器高：1.6cm、厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は灰白色(5Y 7/1)、断面は灰黄色(2.5Y 7/2)。胎土：やや密。直径2mmの赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：9/10。内面に焼成前のヘラ等による線刻の記号がある。Abタイプ。12世紀代のものである。（第10図-34、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-34）

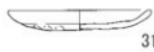


0 5m

第9図 調査地区平面図・断面図 (NN2011-1)



30



31



32



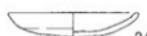
I



33



I



34



35



36



37



38



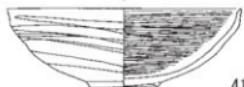
39



40



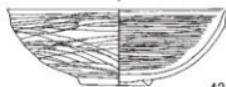
I



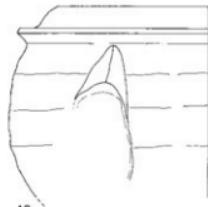
41



I



42



43



0 10cm

第10図 出土遺物 (NN 2011- 1) (1)

35 土師器皿 口径：7.7cm。器高：1.5cm。厚さ：0.4～0.5cm。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 7/1）。胎土：密。微細な雲母を多量に含む。石英・赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。灯明皿の可能性が高い。Ab又はJタイプ。12～13世紀代のものである。出土標高はT.P.+9.219mである。（第9図-35、第10図-35、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-35）

36 土師器皿 口径：7.9cm。器高：1.4cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は灰白色（10YR 8/2）。胎土：密。直径1mmの石英・長石・雲母・赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：完形。Dタイプ。12世紀後半～13世紀代のものである。出土標高はT.P.+9.200mである。（第9図-36、第10図-36、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-36）

37 土師器皿 口径：12.0cm（復元）。器高：2.3cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：密。直径1mmの石英と微細な雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。Abタイプ。12世紀代のものである。出土標高はT.P.+9.158mである。（第9図-37、第10図-37、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-37）

38 土師器皿 口径：12.4cm（復元）。器高：2.6cm（残存）。厚さ：0.4cm。色調：内面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）、外面は灰白色（10YR 8/2）、断面は褐灰色（10YR 5/1）。胎土：やや密。微細な金雲母を多量に、直径1mm以下の赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：1/5。Jaタイプ。12席中頃のものである。出土標高はT.P.+9.402mである。（第9図-38、第10図-38、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-38）

39 土師器皿 口径：14.2cm。器高：2.6cm。厚さ：0.25～0.5cm。色調：内・外面は灰黄色（2.5Y 7/2）。胎土：やや密。微細な金雲母を多量に含む。焼成：良好。残存度：完形。Jbタイプと思われる。12世紀後半～13世紀前半のものである。出土標高はT.P.+9.049mである。（第9図-39、第10図-39、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-39）

40 土師器皿 口径：13.4cm。器高：2.3cm。厚さ：0.4～0.6cm。色調：内面は浅黄橙色（10YR 8/3）、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）、断面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：密。直径1mm程度の赤褐色鉱物を含む。焼成：やや良好。残存度：4/5。Jbタイプと思われる。12世紀後半～13世紀前半のものである。出土標高はT.P.+9.032mである。（第9図-40、第10図-40、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-1-40）

2. 瓦器・瓦質土器

土坑63出土遺物

41 瓦器碗 口径：14.8cm（復元）。底径：4.2cm（復元）。器高：5.0cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外面は灰色（N 4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/3。見込み部に連結輪状文が施されている。楠葉型II-2段階。12世紀後半のものである。出土標高はT.P.+9.086mである。（第9図-41、第10図-41、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-2-41）

42 瓦器碗 瓦器碗 口径：14.0cm。底径：4.4cm。器高：4.9cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。見込み部に連結輪状文が施されている。大和型III-A（古）段階。12世紀後半のものである。出土標高はT.P.+9.262mである。（第9図-42、第10図-42、写真図版7-2・8-1・2、写真図版12-2-42）

43 瓦質土器三足釜 口径：19.0cm（復元）。器高：12.1cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：内面は全面にコゲが付着、外・断面は灰白色（10YR 8/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/5。12世紀後半～13世紀前半のものである。（第10図-43、写真図版12-2-43）

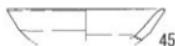
3. 磁器

溝62出土遺物

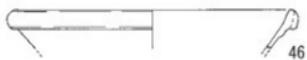
44 青白磁合子蓋 口径：5.8cm（復元）。器高：1.1cm（残存）。厚さ：0.1～0.4cm。色調：内・外



44



45



46



47



48



49



50



51

0 10cm

第11図 出土遺物 (NN 2011- 1) (2)

面は灰オリーブ色（7.5Y 6/2）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面に鷄蓮弁文を施す。D期。12世紀後半のものである。（第11図-44、写真図版13-1-44）

土坑63出土遺物

45白磁皿 口径：10.0cm（復元）。器高：2.0cm（残存）。厚さ：0.5cm。色調：内・外面は灰白色（5Y 8/1）、断面は灰白色（N 6/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。D・E期。12世紀末～13世紀前半のものである。（第11図-45、写真図版13-1-45）

46白磁碗 口径：17.4cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.9cm。色調：施釉面は灰白色（5Y 7/2）、露胎・断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。C期。11世紀後半～12世紀前半のものである。（第11図-46、写真図版13-1-46）

47白磁碗 底径：7.4cm（復元）。器高：2.0cm（残存）。厚さ：0.6～1.4cm。色調：施釉面は灰白色（5Y 7/2）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。C期。11世紀後半～12世紀前半のものである。（第11図-47、写真図版13-1-47）

48青磁碗 底径：5.5cm（復元）。器高：3.4cm（残存）。厚さ：0.5～1.6cm。色調：施釉面はオリーブ灰色（5GY 6/1）、断面は灰白色（N 8/）、疊付部は黄褐色（10YR 5/8）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/3。体部外面に鷄蓮弁文を施す。E期。13世紀初頭～前半のものである。（第11図-48、写真図版13-1-48）

土坑111出土遺物

49白磁碗 口径：17.6cm（復元）。器高：2.8cm（残存）。厚さ：0.4～0.8cm。色調：施釉面は灰白色（2.5Y 8/2）、断面は灰白色（2.5Y 8/1）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。C期。11世紀後半～12世紀前半のものである。（第11図-49、写真図版13-1-49）

4. 須恵器

土坑63出土遺物

50須恵器甕 口径：16.2cm（復元）。器高：5.5cm。厚さ：0.4～0.9cm。色調：内・外・断面は灰色（N 6/）。胎土：直径1mm以下の黒色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。（第11図-50、写真図版12-2-50）

51須恵器片口縫鉢 口径：28.6cm（復元）。底径：11.0cm（復元）。器高：9.6cm。厚さ：0.5～1.1cm。色調：内・外・断面は褐灰色（10YR 4/1）。胎土：直径1mm程度の砂粒をやや多く、小石を少量含む。焼成：良好。残存度：1/2。東播磨系II期第1段階。12世紀中葉～後半のものである。（第11図-51、写真図版12-2-51）

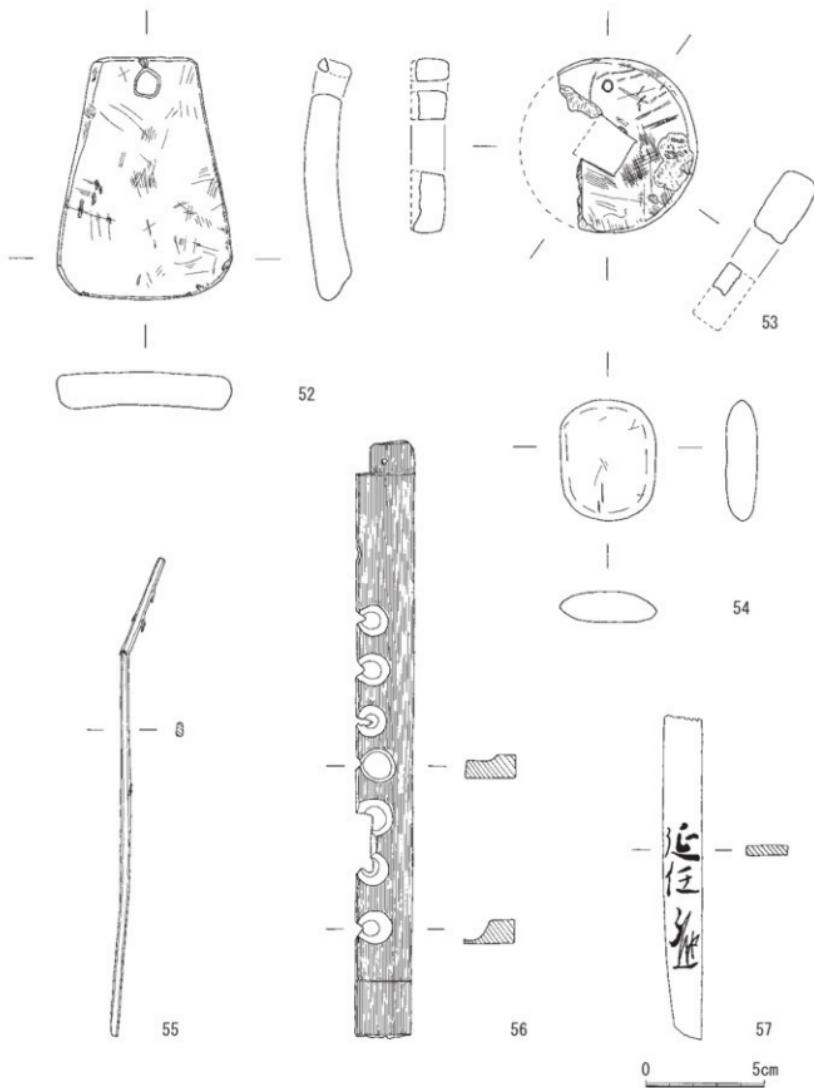
（村上）

5. 石製品

土坑63出土遺物

52温石 長さ：10.25cm。幅：7.4cm。厚さ：1.5cm。色調：表面上半は黄灰色（2.5Y 6/1）、表面下半は黒褐色（2.5Y 3/1）、裏面は褐灰色（10YR 5/1）。ほぼ完形。滑石製である。上部の孔はかなり擦れており、使用時に紐を用いて吊下げていたためと思われる。表面下部が煤により変色している。石鍋の胴部を転用したものと思われる。（第12図-52、写真図版13-2-52）

53温石 直径：7.4cm。厚さ：1.7cm。色調：暗オリーブ灰色（2.5GY 4/1）、被熱により赤灰色（2.5YR 4/1）に変色した部分がある。滑石製である。残存度：3/5。石鍋を転用したものと思われる。凹部、及び上部円孔の内面に煤が付着している。研磨が荒く、折損した未成品の可能性がある。中央の方孔は用途不明であるが、錢の形状を模したものと考える。（第12図-53、写真図版13-2-53）



第12図 出土遺物 (NN 2011- 1) (3)

包含層出土遺物

54 用途不明石製品 長さ：5.1cm。幅：4.05cm。厚さ：1.3cm。色調：暗灰色（N 3/）。いわゆる那智黒石様の石材製である。全面を非常に丁寧に磨いていて、研磨痕等の観察は困難である。碁石とみるには大きく、用途不明である。（第12図－54、写真図版13－2－54）

（實盛）

6. 木製品

55 箸 長さ：20.6cm。幅：0.3cm。厚さ：0.6cm。（第12図－55、卷頭写真図版1－55）

56 火鑓白 長さ：25.3cm。幅：2.4cm。厚さ：1.0cm。他の部材の転用で、表面には直径1.3～1.5cmの円孔の白座が7か所みられる。（第12図－56、卷頭写真図版1－56）

57 木筒 長さ13.7cm。幅：1.3cm。厚さ：0.4cm。「延任口」の墨書があり、「延任」は人名、「口」は花押を記載しているものと思われる。（第12図－57、卷頭写真図版1－57、写真図版14－1）

（村上）

第7章 中野遺跡（NN 2011-1）調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

中野遺跡の今回の調査では、平安時代後期～鎌倉時代前期の時期を中心とした集落を検出することが出来た。検出した遺構としては圧倒的に溝が多く、そのほとんどは東西方向のものであり、これらの溝は耕作時の鋤溝の可能性が高いと考える。調査地区の中央やや南西寄りの位置では、東西方向の土坑群を検出していて、うち7基の小土坑はいずれも直径が0.2mほどで、4.5m程の距離の間に0.6～0.8mの間隔で並んでおり、杭列が存在した可能性がある。この杭列は鋤溝の方向と一致しており、耕作地を区画していた杭列あるいは柵の可能性があるだろう。

鋤溝が多い一方、土坑の密度はそれほど多いものではなく、この場所は集落の縁辺部付近にあたっていた可能性があるとみる。集落の縁辺部で、時期によって耕作地として利用されたり、集落の一部として利用されたりしていたため、このような遺構の検出状況となっているものと考えたい。

調査地区東端で検出した土坑63からは、多くの遺物が出土した。なかでも「延任」の人名が書かれた木簡は特筆すべきものである。独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で鑑定を受けた際には、「のぶとう」と「えんにん」の二種の読み方が考えられ、「のぶとう」の場合は俗人、「えんにん」の場合は僧侶の可能性があると教示を受けた。

「延任（えんにん）」は役職に任期満了後もそのまま在任させる意味があり、文献記録にもこの意味の「延任」の記述が多く載るが、文献記録内で人名の可能性がある「延任」の記述を探すと、『巖島神社文書』の『微古雜抄』で応徳2(1085)年2月10日の記事内に「橘延任」、『平記』のうち『行親記』の長暦元(1037)年閏4月14日の記事に「宮内丞延任」、『近衛家本知信記天承二年卷裏文書』の天承2(1132)年8月の記事に「橘延任」、『九条家歴世記録』の建暦2(1212)年7月2日の記事に「延任」、時期は降るが『後愚昧記』康安元(1361)年2月21日の記事に「近衛 秦延任」、同じ文書の応安2(1369)年1月24日の記事に「番長 秦延任」、『看聞日記』応永23(1416)年3月26日の記事に「延任入道」などの記述がみられる。また、『東大寺文書』には康平2(1059)年に書かれた紀延任の花押が載るが、今回出土した木簡の花押とは異なるものである¹⁾。

これらの文献記録に載る人物と今回出土した木簡の人物が同一かどうかは不明であるが、中野遺跡付近に「延任」という人物が住んでいたか、もしくはこの土地と何らかの関係を持つ「延任」という人物がいた可能性を示すと言える。出土した土器からは、土坑63は12世紀後半から13世紀前半のものとみられ、平安時代末～鎌倉時代初頭の年代を与えることができる。上記のように近接する時期の複数の文献記録には幾人かの「延任」の人名の記述があり、当時普通に用いられた人名と言えるだろう。四條畷市内では、人名が墨書きされた土器はいくつか出土例があるが、人名の書かれた木簡の出土は初めてである。今後地域の歴史を考えていく上で、重要な資料になると見えるだろう。

このように、今回の調査では中野遺跡の縁辺部における土地利用形態を復元し、この地域に何らかの影響を与えたであろう「延任」という人物名の木簡が出土して、地域の歴史復元に一石を投じる成果を上げることが出来た。中野遺跡ではこれまでにも中世集落を検出しているが、今回の成果は遺跡縁辺部を調査できたという点で重要なものと言えるであろう。

(實盛)

註

- 1) 文献記録内の記述の検索は、下記の東京大学史料編纂書が公開しているデータベース等を用いた。

<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html> (2014年2月27日閲覧)

参考文献

- 阿部幸一 1999『雁屋遺跡発掘調査概要』IV、大阪府教育委員会。
- 井上智博・多賀晴司編 2003『讃良郡条里遺跡』その2、財团法人大阪府文化財センター。
- 井上智博編 2008『讃良郡条里遺跡』VI、財团法人大阪府文化財センター。
- 岩瀬 透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編 2010『龍屋北遺跡』I、大阪府教育委員会。
- 岩瀬 透編 2012『龍屋北遺跡』II、大阪府教育委員会。
- 梅原末治 1937『河内四條畷村忍岡古墳』『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原末治 1985『銅鐸の研究』木耳社。
- 大阪府教育委員会編 1970『四条畷町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
- 片山長三 1967a『枚方台地の先土器時代遺跡』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 片山長三 1967b『縄文時代遺跡』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 黒田 淳 1989『飯盛山城跡の調査』『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳 2013『飯盛山城跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
- 近藤章子・山本雅和・多賀晴司編 2008『讃良郡条里遺跡』IV、財团法人大阪府文化財センター。
- 佐伯博光・六辻彩香編 2007『讃良郡条里遺跡』V、財团法人大阪府文化財センター。
- 櫻井敬夫 1972『考古学』『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。
- 櫻井敬夫・佐野高美・野島稔 2006『どこでも歴史 わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野高美・野島稔 2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
- 四條畷市教育委員会編 2003『みどりの風と古墳』第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編 2004『馬と生きる』開館20周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編 2008『ひとつぶの糉』第23回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 瀬川芳則 1992『最古の木製下駄』『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。
- 辻本 武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 中尾晋行・山根 航編 2009『讃良郡条里遺跡』VII、財团法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩 2001『和泉陶邑出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
- 西尾 宏 1987『中野遺跡発掘調査概要』IV、四條畷市教育委員会。
- 西尾 宏 1988『中野遺跡発掘調査概要』V、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1977『四條畷市中野遺跡』『まんだ』第2号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1978a『中野遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1978b『南山下遺跡』『まんだ』第5号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1978c『大阪府四條畷市発見の製塙土器』『古代学研究』第80号、古代学研究会。
- 野島 稔 1979『岡山南遺跡出土の古代下駄』『まんだ』第8号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1980a『清滝古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会。
- 野島 稔 1980b『四條畷市奈良井遺跡(2)』『まんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1980c『四條畷市奈良井遺跡』『まんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1982『岡山南遺跡発掘調査概要』II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1983『忍ヶ丘駅前道路発掘調査概要』II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1984『雁屋遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1985『四條畷市南野米崎遺跡』『まんだ』第24号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1986a『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要－1985年度－』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1986b『中野遺跡発掘調査概要』III、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』IV、四條畷市教育委員会。

- 野島 稔 1987c 「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1987d 「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1988 「四條畷市「南山下遺跡」」『まんだ』第35号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1990 「四條畷市・中野遺跡」『まんだ』第39号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1993a 「四條畷市忍ヶ丘駅前遺跡」『まんだ』第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1993b 「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1994a 『雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1994b 「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第51号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1994c 「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第53号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1995 『南野遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1996a 「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1996b 「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997a 「五絃の琴」『まんだ』第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997b 「四條畷市更良岡山遺跡（一）」『まんだ』第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997c 『はにわともだち 第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館』。
- 野島 稔 1999 「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔編 2000 『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也 1976 『圓山南遺跡発掘調査概要 I』、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也 1977 『正法寺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田暢 1984 『圓山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要 III』、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上始 2000 『奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上始 2001 『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上始 2003 『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上始 2012 『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 松岡良應 1987 『中野遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 宮野淳一 1992 『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳樹 2007 『弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群』『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、財团法人大阪市文化財協会。
- 村上 始 1997a 『木間池北方遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 1997b 『忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2000 『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001a 『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001b 『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001c 『大阪府鎌田遺跡の調査速報』『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
- 村上 始 2001d 『四條畷市鎌田遺跡』『まんだ』第71号、まんだ編集部。
- 村上 始 2001e 『大阪府鎌田遺跡の調査速報』『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始 2001f 『四條畷市雁屋遺跡』『まんだ』第73号、まんだ編集部。
- 村上 始 2003a 『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2003b 『大阪・中野遺跡』『木簡研究』第25号、木簡学会。
- 村上 始 2004 『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2006 『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2011 『雁屋遺跡の発掘調査』『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
- 村上 始・實盛良彦 2013a 『中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・圓山南遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2013b 『北口遺跡・讚良都条里遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編 2013 『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 山口 博編 1972 『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博 1990 『四條畷市史』第4巻、四條畷市役所。

第1表 四條畷市教育委員会発行の埋蔵文化財調査報告書一覧

番号	執筆者	発行年	題目	発行機関	
				号	シリーズ
1	野島 慶・岸井良士、 野島 勝・酒井達也、花田照也	1976	龍山下遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	1 西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書
2	野島 勝・酒井達也、花田照也	1976	龍山下遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	2 西条市埋蔵文化財調査報告書
3	野島 勝・酒井達也、花田照也	1976	正寺寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	3 西条市埋蔵文化財調査報告書
4	野島 勝	1976	正寺寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	4 西条市埋蔵文化財調査報告書
5	野島 勝	1976	中野路余跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	5 西条市埋蔵文化財調査報告書
6	野島 勝	1976	酒井古墳群発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	6 西条市埋蔵文化財調査報告書
7	野島 勝	1976	田代寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	7 西条市埋蔵文化財調査報告書
8	野島 勝・櫻井忠夫	1980	東山田古墳群発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	8 西条市埋蔵文化財調査報告書
9	野島 勝	1980	東山田古墳群発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	9 西条市埋蔵文化財調査報告書
10	野島 勝	1981	田代寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	10 西条市埋蔵文化財調査報告書
11	野島 勝	1983	志江五郎塚古墳群発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	11 西条市埋蔵文化財調査報告書
12	野島 勝・前田 幸	1984	朝日山跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	12 西条市埋蔵文化財調査報告書
13	野島 勝	1984	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	13 西条市埋蔵文化財調査報告書
14	野島 勝	1985	田代寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	14 西条市埋蔵文化財調査報告書
15	野島 勝	1985	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	15 西条市埋蔵文化財調査報告書
16	野島 勝	1985	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	16 西条市埋蔵文化財調査報告書
17	野島 勝	1985	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	17 西条市埋蔵文化財調査報告書
18	野島 勝	1985	志江五郎塚古墳群発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	18 西条市埋蔵文化財調査報告書
19	野島 勝	1987	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	19 西条市埋蔵文化財調査報告書
20	野島 勝	1987	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	20 西条市埋蔵文化財調査報告書
21	野島 勝	1987	中野路跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	21 西条市埋蔵文化財調査報告書
22	西条市文化財調査委員会	—	—	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	—
23	西条市文化財調査委員会	IV	西条市埋蔵文化財調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	23 西条市埋蔵文化財調査報告書
24	西条市文化財調査委員会	V	西条市埋蔵文化財調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	24 西条市埋蔵文化財調査報告書
25	西条市文化財調査委員会	—	—	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	—
26	村上 始	1997	木戸山北遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	25 西条市埋蔵文化財調査報告書
27	野島 勝	1999	正寺寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	26 西条市埋蔵文化財調査報告書
28	村上 始	1999	寺口遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	27 西条市埋蔵文化財調査報告書
29	野島 勝	2000	夷良山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	28 西条市埋蔵文化財調査報告書
30	村上 始	2000	忍野小学校内遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	29 西条市埋蔵文化財調査報告書
31	野島 勝・村上 始	2000	鳥居田遺跡・鳥居井遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	30 西条市埋蔵文化財調査報告書
32	村上 始	2000	人ノ坪遺跡・田代寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	31 西条市埋蔵文化財調査報告書
33	野島 勝	2001	正寺寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	32 西条市埋蔵文化財調査報告書
34	野島 勝・村上 始	2001	南山下遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	33 西条市埋蔵文化財調査報告書
35	村上 始	2002	正寺寺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	34 西条市埋蔵文化財調査報告書
36	野島 勝・村上 始	2002	船井山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	35 西条市埋蔵文化財調査報告書
37	村上 始	2002	船井山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	36 西条市埋蔵文化財調査報告書
38	野島 勝	2003	西条市内外遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	37 西条市埋蔵文化財調査報告書
39	村上 始	2004	佐野原跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	38 西条市埋蔵文化財調査報告書
40	野島 勝	2005	御所原跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	39 西条市埋蔵文化財調査報告書
41	野島 勝	2006	御所原跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	40 西条市埋蔵文化財調査報告書
42	野島 勝	2006	上野山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	41 西条市埋蔵文化財調査報告書
43	村上 始	2006	上野山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	42 西条市埋蔵文化財調査報告書
44	野島 勝・村上 始	2010	清瀬遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	43 西条市埋蔵文化財調査報告書
45	野島 勝・村上 始	2010	奈良山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	44 西条市埋蔵文化財調査報告書
46	野島 勝	2013	奈良山遺跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	45 西条市埋蔵文化財調査報告書
47	野島 勝・村上 始	2013	北山遺跡・御所原跡発掘調査報告書	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	46 西条市埋蔵文化財調査報告書
48	野島 勝・村上 始	2014	四條畷市文化財調査年報	西条市埋蔵文化財調査地元調査報告書	47 西条市埋蔵文化財調査報告書